**自分だけのかまくらを作ろう**

横手地区は「かまくら」と呼ばれるドーム型の雪像が有名である。20世紀半ばまでは各家庭で作られていたが、現在では横手のかまくらのほとんどが「かまくら職人」と呼ばれる専門家によって作られている。職人になるためには、まず横手観光協会の「かまくら職人見習い」プログラムに参加し、雪祭りの期間中にかまくら職人と一緒に仕事をすることができるようになる。十分な経験を積むと、観光協会から正式なかまくら職人として認められる。しかし、正式な職人になってもならなくても、自分でかまくらを作るのは冬の醍醐味である。

**ドームの形を整える**

かまくらを作るには、まず雪山の周囲に印をつけることから始まる。まず、2本の棒を1.8メートルのロープで結ぶ。片方は雪に突き刺し、もう片方は製図用コンパスのようにして、直径3.6メートルの円を描く。次に、スコップの背や自分の足を使って、円の中に雪を少しずつ積み上げる。2.5メートルの高さになったら、さらに雪を積み重ね、丸めてドーム状にして、高さ3メートルの構造にする。積み上げた雪は2〜3日で固まり、内部の作業に入る。

**内部を切り出す**

雪が固まったところで、横70センチ、縦130センチの楕円形を棒で描いて、入口の印をつける。かまくらの中で火鉢を使うときに風通しを良くするためには、入口を大きくすることが重要だ。次に、シャベルを使ってドームの壁の厚さが70cmになるまでくり抜く（壁の厚さは、内側から棒を突き出して確認できる）。シャベルの背を使って、ドームの内側と外側の壁を滑らかにする。

**祭壇の形**

伝統的には、内壁に長さ1メートル、高さ20〜30センチほどの棚を掘り、入り口に面した祭壇を作る。この棚はお供え物が置くためのもので、神道に由来するものである。次に、棚の10cm上に深さ10cmの矢印型の床を掘る。床の間の壁には、「水神様」の文字が書かれた長方形の紙が飾られている。祠の前の棚には、ロウソクや果物、酒などのお供え物などが並べられる。筵（むしろ）や小さな火鉢を持ち込み、かまくらの中で餅や甘酒を作ることもある。